

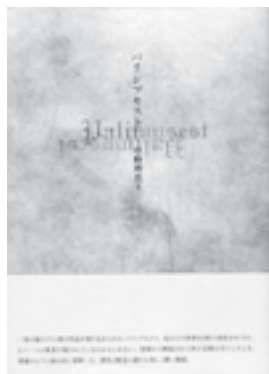
横浜詩人会通信

2015.10.1

№296

横浜詩人会事務局 横浜市西区境之谷 30-19 油本方 TEL045-516-3182

発行人 中上哲夫(会長) 横浜市鶴見区馬場 7-28-15-1 *郵便振替 00230-0-5574 ヨコハマシンカイ



〈略歴〉
 草野理恵子(くさのりえこ)
 一九五八年 北海道室蘭市生まれ。
 新潟大学教育学部卒。白鳥省吾賞
 最優秀賞・優秀賞。白秋献詩特
 選。神奈川新聞文芸コンクール最
 優秀賞。国民文化祭実行委員長賞。
 文芸思潮優秀賞。日本詩歌句大賞
 優秀賞。ほか。



第47回横浜詩人会賞決定!!
 草野理恵子氏『パリンプセスト』(土曜美術社出版販売)

横浜詩人会賞受賞の言葉

草野理恵子

先日携帯が鳴りました。未登録の番号でした。出るか出ないか迷ってじっと見つめていました。事務局の方は、思ったでしょうね。「早く出ろ〜!」と。(お待たせしてすみません。)そして「横浜詩人会賞受賞」という身に余る光栄なお言葉をいただきました。未だに信じられない思いでおります。推薦してくださった方々、選んでくださった選考委員の方々、詩集制作に携わってくださった全ての皆様、空の雲にも石ころにも今、側を駆け抜けた蜘蛛の子にもありがとうと言いたい日々です。そして一番に感謝したいのは、三番目の子との長く苛酷なてんかん発作の日々です。口唇口蓋裂で生まれた息子の三か月時で手術の日から始まったてんか

ん発作は、呼吸停止を伴うひどく重篤なもので一瞬たりとも目を話すことができませんでした。書くことは、発作の回数、呼吸停止の時間、発作の種類、発熱、下痢、ミルクの、おしっここの量……。息子の病状の記録しかできませんでした。その中で、それまで細々と書き続けていた詩の存在がとても必要なものであることに気づきました。「書きたい。」そう思いました。病院からの帰り道、星を見上げながら自由が失われているように感じました。でも、私は何も失っていませんでした。詩への気持ちを、書けることの僥倖を知ったのは、この時間があったからです。ありがたいことに新薬により発作は激減しました。鉛筆の先は自由になりました。と、立派(?)なことを書きましたが、実際の私はご覧の通り落ち着きなく、思い込み激しく、迷子になつてばかりの人間です。変な方向に向かって歩いていましたら、道を教えてくださいます。どうぞよろしくお願いいたします。

第四七回横浜詩人会賞選考経過報告

渡辺みえこ選考委員長

二〇一五年九月十三日午後一時から野下地区センターで、第四七回横浜詩人会賞第二回選考委員会が持たれ、六人の選考委員によって議論された。

中上哲夫会長の横浜詩人会賞は横浜詩人会の重要な仕事であるという挨拶があり、油本達夫理事長の進行で始められた。

対象となった十五詩集のうち辞退者、五冊以上の詩集出版者等二名を除いた十四冊が対象となった。

七人の選考推薦の五詩集の投票では以下の詩集がそれぞれ六票で残った。草野理恵子詩集『パリンプセスト』、広瀬弓詩集『みずめの水玉』、若尾儀武詩集『流れもせんで在るだけの川』。

その他、選考が注目した詩集について議論が交わされた。

福島純子詩集『ジャンピンブ・ビーンズ』は、一票であったが、日常の違和感、戸惑い等が描写力豊かに表現されていて可能性が感じられる。自分を鰯

に譬えたのはリアリティがあつてよい。しかしたくさんのことを入れ過ぎて焦点が定まらぬところがあるが、今後が楽しみである。

方喰あい子詩集『誰かに手渡したくて』(悪は、いのちへの願いが込められているのが読みとれるが、もう少し言葉の新鮮さが欲しい。

若尾儀武詩集は、書くことの強い思いがあり、棘が刺さってきて、歴史的批評性のあるよい詩集だが、在日韓国のテーマにも、対象に迫る力や、表現の独自性、新しさ等が欲しい。

広瀬弓詩集は、幻想的想像力の豊かさが魅力で、詩はうまくなっている。被爆などのテーマを広げたい。民俗学からの作品は、身につけているとは言い難い。

全員一致で草野理恵子詩集に決定した。溜めてきた言葉の強い力が、ひりひりと感じられ新鮮だ。しかし今後の課題として、二枚の絵の隠されたものはなにか、の象が結び難く、絵を剥がした次の世界が見えてこない。閉じられた世界に、読者にさらに納得させる表現を構築して欲しい。

選考を終えて

荒船健次選考委員

五冊持参したが、最終選考に残らなかつた詩集は井上麻耶詩集『闇の炎』、福島純子詩集『ジャンピング・ビーンズ』である。残った詩集の『流れもせんで、在るだけの川』は、歴史

をふまえ、少年の裸の目を通して民族間の隔たりを超える心が描かれている、対象への踏み込みの足りなさが惜しまれる。『みずめの水玉』は水へのこだわり

に好感を持てるが、民俗学への凭れが詩にやや生硬さを感じさせる。ヒロシマをテーマにした詩は、熱い思いが伝わる。受賞しても遜色ない詩集だ。『パリンプセスト』の特異さは衝撃的

であるが、その感性は開かれているとはいえない。にもかかわらず新しさを感じさせる魅力を秘めている。今後活躍が期待

できる可能性を秘めており、受賞に相応しい詩集と感じた。心より祝福したい。

選考の言葉

今泉協子選考委員

横浜詩人会賞の最後の選考がきまつたのは九月十四日の夕刻だった。選考は徳広康代、木島章、光富郁埜、田村雅之、渡辺みえこ、荒船健次と私の七人だった。

十六冊の詩集からひとりの詩人会賞を選抜するのは、時間のかかる仕事だと思っていた。最初に三冊の詩集を選んだ時点で、七人の選考の考えが一致していた。それで割に早く草野さん若尾さん広瀬さんの三名を選ぶことができて、よかったと思う。

次に三名の詩人の中から、草野理恵子さんの『パリンプセスト』が横浜詩人会賞として選出されることになった。

人の日常の表皮をめくると、もうひとつの風景が隠されていることがある。作者はそれを経験して、恐怖から解放され再びペンを持って描くことができた。未来につづぐ作品を祝福したい。

作品と真摯に向き合う

木島章選考委員

初めて賞の選考委員となり、まずは多くのすぐれた作品群と出会う機会をいただいたことに感謝したいと思います。

受賞した草野理恵子さんの『パリンプセスト』は、私が当初推していた何冊かの詩集には入っていませんでした。しかし、他の選考委員の方たちの鋭い批評や深い考察に触れ、この詩集に対し私が見落としていたり誤解したりしていた点(たとえば草野さん自身が発想を得たと語る片山健の絵画作品に対する固定観念など)が消えていき、まさに表層を剥がすと別の絵が顕わになるパリンプセストのように、草野さんの詩想の骨格が鮮やかに心に落ちてきました。

あたりまえのことですが、詩を読むことの原初的な難しさ、それゆえの楽しさを、選考を通じてあらためて思い知らされたような気がします。

選考の言葉

田村雅之選考委員

二〇一五年第四十七回横浜詩人会賞の対象詩集一覽が送られてきた。その中から、とりあえず以下の五冊の詩集を選び、選考会にのぞんだのだった。

広瀬弓『みずめの水玉』、草野理恵子『パリンプセプト』、若尾儀武『流れもせんで、在るだけの川』、うめだけんさく『言葉の海』、方喰あい子『誰かに手渡したくて』である。

上位三冊は、広瀬、草野、若尾詩集。最終は、広瀬、草野詩集になるだろうと予測した。

広瀬弓の折口信夫の『水の水』を思わせる巫女性。「みずめ」という、性からの脱却のモチーフは、魅力的であった。

いっぽう、内面の飛躍と感覚の明滅を持つ草野理恵子の『パリンプセスト』は言葉の力という点では群を抜いていた。意味や像として結実しない弱点はあるものの、期待度は一なのである。

選考を終えて

徳弘康代選考委員

表現は卓越している。表現する世界も異彩である。が、読んでいて何か中心に行きつけないイメージを結ばない歯痒さがあった。作品の注に片山健の絵画を参考にしたとあって、それで歯痒さの理由が分かった。草野さんには絵が見えていて、その印象や共感から詩ができているが読者にはそれが見えない。それで行きつけない感じがしたのである。これが『パリンプセスト』(絵の下にも一枚絵がある)ということだろうか。ところで、下にも一枚絵が隠れていると言われたら、全く違うものを想像してしまう。その方が面白い。残念ながら片山健の絵と草野さんの詩は同傾向だ。

同傾向なら、もとの作品を超えているのは難しい。草野さんの表現は恐ろしく魅力的だ。だからこそ、絵の裏絵ではなく独りで成立する絵を、と次の詩集に更なる期待をする。

印象に残る四作品について

光富郁埜選考委員

推したのは、若尾詩集、宗田詩集、草野詩集、広瀬詩集。

若尾詩集は異論はあるが、タイトルにも惹かれた。方言を巧みに使う、文章表現が上手い、テーマは在日の問題を扱う。内容的に物を書く強い根拠がある。

宗田詩集は収録作「琴爪橋」のさりげない言葉の置き方、展開の仕方に好感。「紫たまねぎを掘りあげた日」の日常性の割れ目に流れる残酷な童話的なものと美しさの調和が上手い。

草野詩集は平明な文体だが、奥に何かがある。「土」に捉えきれない部分もあるが、怒りが伝わる。「菊」の被爆した女性が少しずつ朽ちていく様に、インパクトがある。全体として日常の下にある狂気、グロテスクさがある。画集に着想を得た作品は、オリジナルの絵を越えたか。説明的・散文調の部分は如何か。広瀬詩集は巧いが、字間の空きや擬音・擬声の部分に疑問。